ドラマ「アット・ホーム・ダッド」

における「嚊天下」

チャンド・キラナ

0442028

マラナタキリスト教大学
文学部
日本文学科
バンドン
2009

要約

序論

明治時代以降の近代化(1868 年～1912 年)において解放運動及びフェミニズムが誕生したため、日本人の女の人は自分達の権利に注目をし、市川房枝により「新婦人協会という」新しい女の人の組織が結成された。[1]「家制度」が弱くなったため、自由主義が家族生活に普及することになり、様々な職業において女の職員が出現し、男の人のように教育を受けることも自由になった。

男の人と女の人が平等あることが普及することになり、家事の仕事しかしない、つまり主婦であった妻が女性職員になった場合も出てえた。家族の人の数が減ってきたせいで、出生率が減ってきたが、核家族が増えてきた。伝統的な家族と異なり、核家族は両親とともに大きな家に住まないため、もっと自由である。[2]

一般の日本社会においての家族形式は家父長制度あるいは「亭主関白」であるが、家母長制度つまり「嚊天下」である家族も存在する。嚊天下とは、妻が家庭の実権を握っている家庭のことである。実権を妻が握ったため夫は銀行口座等を妻にとり上げられ、妻に頭を下げ小遣いをもらっ

[1] Janet E.Hunter, *The Emergence Of Modern Japan An Introductory History Since 1853* (Longman Group, 1989), hal. 144
[2] Yoshio Suginoto,*An Introduction To Japanese Society* (USA: Cambridge University Press, 1997), hal. 52

ている。家庭内の事は妻が全ての決定権を待ち、夫は妻に従わなければならない、そして子供は父である夫より、母である妻の方が偉いと思い込む。[3] 一般の「アット・ホーム・ダッド」ドラマでは嚊天下の家族形式が「笙子」と「美紀」によって反映されている。

本論

妻が家庭におけるを配権を握っておりきがそれに対して反抗できない情態をドラマ「アット・ホーム・ダッド」はよく反映している。次はそれらの例である。

¤ 「杉尾」というキャラクター

第 4 話の 49 分 57 秒において、「杉尾」は妻が知らずに、インターネット株をやっており、16 万円を使ったときである。その場面において、杉尾は自分のために抵抗できず、頭を下げながら、妻の質問を答えた。妻である「笙子」は家族のためにお金を稼いでいるため、自分が家族において偉い役目を持つと感じていた。したがって、家族に関わることの全て笙子は知らなければならないし。また笙子の許可を得なければならないのである。

¤ 「笙子」というキャラクター

第 5 話の 21 分 24 秒において、「笙子」が夫である「杉尾」に生まれる二番目の子供を育てるように頼んだときである。「杉尾」

[3] http://www.wikipedia.かかあ天下.htm

は 賛成し、長男である「良太」のように育てようと思った。その場面において夫は妻の言うことを聞いたのである。

- 「山村」というキャラクター

第 10 話の 9 分 53 秒において「山村」がアルバイトしたいと言っているとき、妻である「美紀」は許可を出さなかった。しかし、結局「山村」は「家事のことの邪魔にならないように」という条件でアルバイトをする許可を得たのである。その場面においては「山村」は自分がアルバイトできるために、その条件を受けたのである。

- 「美紀」というキャラクター

第 1 話の 27 分 01 秒において「山村」が「美紀」の母親がお金を貸してくれると聞き、嬉しくなったが、妻である「美紀」はすぐ「いいよ！」と断ったのである。「山村」も妻の意志に反対せず、妻の言うことに従ったのである。

結論

「アット・ホーム・ダッド」というドラマは「笙子」と「美紀」に代表されるように、今女または妻は働くことができ、家庭の実権を握ることができることを反映している。この映画はたいてい「経済が発達したため、女の人に会社で働く意志を持たせた」と判断できる。したがって、妻は結婚して、子供を持っていても、仕事を続けたいという意志を持つ。結婚して、仕事を続けたい「笙子」のような、また、リストラされた夫の代

わりに仕事をする「美紀」のような人生である。「美紀」はそのようなことをするのは家族の経済生活のため及び親である自分の責任のためである。

DAFTAR ISI

Halaman

KATA PENGANTAR i

DAFTAR ISI v

BAB I PENDAHULUAN

1.1 Latar belakang masalah 1

1.2 Permasalahan 5

1.3 Tujian penelitian 6

1.4 Metode penelitian 6

1.5 Organisasi penelitian 8

BAB II KELUARGA JEPANG

2.1 Keluarga Tradisional 10

2.2 Keluarga Modern 13

2.3 Keluarga Kakaadenka 19

BAB III ANALISIS KAKAADENKA DALAM DRAMA AT HOME DAD

3.1 Sugio 24

3.2 Yamamura 33

3.3 Shouko 44

3.4 Miki 49

BAB IV KESIMPULAN 57

DAFTAR PUSTAKA 60

LAMPIRAN PEMERAN DI DALAM DRAMA vii

SINOPSIS xii

RIWAYAT HIDUP PENULIS xvi